京都 WEB マガジン
現代アートとサイエンス
Kyoto WEB Magazine
Contemporary Art and Science
ISSN 2433-4006

私とコンテンポラリーアート

I and Contemporary Art

桐谷さえり

KIRITANI Saeri

私の作品のメタファーは常に「内」と「外」の関係だと思っています。そして人生の中の「安定」と「混乱」という対照的な出来事をいつも考慮しています。表面的には安定している社会の裏側に焦点を当てたり、一般的には美しいと思われない物、時にはグロテスクだと思われるような物、またはつまらないと思われるような物から美を追求することが好きです。

幼児期、筋肉腫瘍の治療のため、２歳から４歳半ぐらいまで放射線治療を受けていたのですが、放射線は身体に悪いため、なるべく的を絞って当てないといけないということで、放射線治療の直前には局部を除き、放射線予防の帯のようなもので体をぐるぐる巻きにされ、ベットにベルトで固定され、投射時には息を止めなければなりませんでした。考えてみると、この体験が私のアートに対してのメタファーになっているのかもしれません。例えば、普段見ることのない内臓や血液などの体液などに興味を覚えました。

In my work, I explore the relationship between “inside” and “outside”. I consider the contrast between comfort and disturbance events in our lives. Behind the surface levels of culture there is always a hidden world. I am searching to find beauty in objects that are considered grotesque or bland, or in objects not considered at all. Between the ages of two and five, for the radiation treatment of my sarcoma, a doctor wrapped my entire body completely with preventive cloth, except the affected part. This experience is a central metaphor for my concepts. For example, I expose images of internal organs and body fluids, such as blood, that we do not have a chance to see in our ordinary life.

サンフランシスコの大学に通っていた頃、人物画の顧問の先生に、病院の死体置き場にデッサンに行ってみたらどうか、と言われました。そこでカリフォルニア大学病院の死体置き場に初めて行きました。病院の１３階にある死体置き場は、窓が広いためとても見晴らしがよく、空も広く、サンフランシスコ湾が綺麗に見え、アルカトラスもくっ

きり見えるような一等地でした。ですがその広い部屋には、ホルマリン漬けになった血の気のあまりない何体もの死体がベットに横たわっていました。バケツのような入れ物には、切断された人体のようなものも見られました。肌の色が蝋人形のような色になっていたため、まるで人形のように見え、生々しくはなかったのですが、ホルマリンの何とも言えない甘いような不思議な匂いが鼻につんざき、それが印象的でした。人物画のクラスで体の仕組みは学んでいたとはいうものの、解体された本物の人体を見るのは初めてで、その肌の奥にある内臓や筋肉、骨を直近に見たときは、なんて人間は奥行きが深いのだろう、と感心しました。肌はほんの１センチ以下？の厚みで、その奥にあるものの方が、ずっと容量があるのです。それに、内臓や骨、筋肉にも個性があり、それでいて、一貫性があるのです。何とそこには、今まで見たことのない未知の世界があり、知覚やイマジネーション、または感情とは違った世界がありました。その時、この薄い皮で覆われた身体の内側を表現しよう、と思いました。これが私のコンセプトです。

When I was an undergraduate student at San Francisco, I visited a morgue. Although familiar with basic anatomy, seeing the dissected bodies -filled with internal organs, muscles, and bones-opened a new world, hidden by less than a quarter inch of skin. Internally. Each body was unexpectedly distinctive, yet there were universal similarities regardless of external differences. Humans' internal bodies are an unperceived world that lies beyond our consciousness, imagination or emotion. I am exploring this concept of our hidden inside covered by thin outside wrapping.

私達の身体を覆っている肌、その外見で判断するのはステレオタイプな見方でしかありません。人間の内部は肌の奥にびっしり詰まっているのです。肌の違いを超えた人間に注目したい、違った人種、異なる性、異なる地位、そして身体の健康の違いなどにも着目して行きたいと思います。傷ついた身体、身動きできない身体にもコスミックな美しさがあります。方法としては、パフォーマンスなどをすることによって、外見的なステレオタイプから抜け出すことができます、そしてそのパフォーマンスを記録すること

ができます。アイデンティティーや人との関係をビデオを通して探求することは、私のアートにとってとても重要な要素です。病院、地下鉄、シアターなどの一般的な場所や、ダイナミックな異文化が交わる数々の公共の場は、とても良い刺激になります。そんな公共の場所で、アートを通して一般の人々の興味を引き、その人々に問題を問いかけていくことが私の役目だと思っています。

The outside coverings people use to protect their insides are often perceived in stereotypical ways. I would explore more deeply people of different race, sex, class and health. Wound-up bodies that can hardly move also have cosmic beauties. Performance allows insight beyond stereotypes though creating a record of behavior, which can then be decontextualized. Exploring the identities of and relationships between people, on video, is an important direction in my work. Reporting hospitals, subways, theaters, and other public places in a culturally dynamic environment provide an ideal setting for this work. I attempt to create images that demand attention and ask perplexing questions of the observer.

ビニールや紙、アルミフォイルなどでぐるぐる巻きにするラッピング・パフォーマンスをすること、この行為によって、社会から自分の存在を抹殺することができるのです。世間の軌道に乗り切れない自分、一般の人達とは違っている自分、そんな自分の存在をこの行為によって、現実社会から隠すことができるのです。しかしながらこの行為は、一般の人々が普通に服を着て、ある程度の自我や個性を隠しながら公共の場に出る行為と何ら変わらないのかもしれません。ラッピングでぐるぐる巻きにすることで、私は見えない存在になります。ところが、そのラッピングされてしまった私の身体は、一般的ではないとても奇怪な姿となって公共に晒し出ることになります。誰なのかはわからないわけですが、奇怪な分、注目される対象になるかもしれない。ラッピングをすることにより、私は第二の自分を創造することになるわけです。

In my first wrapping performance, I encapsulated myself in plastic, paper and aluminum foil. By doing this, I am exploring, disappearing from the existence of myself and from society in an almost suicidal way. I am hiding because, to be different from others is not acceptable in society. This represents that people have to cover their identity and individuality to be adjusted in the world. I am invisible and sealed from society, yet I am on display in public, simultaneously anonymous and the center of attention. By wrapping myself in these materials, I deform myself but build another form.

「蛹」パフォーマンス写真、40 x 55 cm（1998年〜）
“Cocoon”, performance photography, 40 x 55 cm (1998~)

ビデオ作品、「地下鉄」と「ビジネスマン」では、人々をサランラップで全身ぐるぐる巻きにした後、公共の場所、地下鉄や道路などで自然に行動してもらいました。その行動は普段の行動とは変わらないにもかかわらず、芋虫のような様相なので、それだけで社会では通常通用しない状況を生み出したのです。これらの作品は、１９６０年代にHERMANN NITSCH や GÜNTER BRUS が実行した公共でのラッピング・パフォーマンスの影響を受けています。ラッピングすることにより、異常な状況を作り出し、ある

意味での奇怪な統一感を作り上げながらも一般の人々と接することが可能となったのです。

For “Subway” and “Businessman,” I sealed people in plastic in public places. I was investigating a subversive pathos in a "wrapped" systematic society, one in which we are expected to dress and act the same as others. These cocoon-like creatures invade society and disrupt the behavioral rules of our narrowly-defined social parameters. In the 1960's, Nitsch and Brus created a dramatically eventful display by staging a wrapping performance. There is a dualism in these abnormal, out of place people wrapped in plastic, a material, which suggests utility and uniformity. In this performance, wrapped people punctuate everyday interpersonal and individual relationships to the public.

「ビジネスマン」ビデオ作品 3分 静止画（1998年）
“Businessman”, video, 3 minutes, still image (1998)

「地下鉄」ビデオ作品 14分 静止画（1998年）
“Subway”, video, 14 minutes, still image (1998)

「イマージン２１、パート１＆２」の作品では、色々な国籍の人たち４３人に、今までの人生の中で、１番衝撃的だったことを１分間で語ってくださいとお願いし、それぞれの母国語で答えてもらいました。時計を渡さなかったため、人によって「１分間」が１分よりも長い人や短い人がいました。その状況をビデオで収録後、編集の際、４３人から６人ずつ、顔と声をだんだん重複させながら、統合を試みました。パート２では、４３人の人達の顔を１人ずつ約２秒間、お椀の水に映し、徐々に顔が交代して行く作品を作りました。この作品を作っている期間に９１１のテロが起こってしまいました。バックグランドに使った曲は、ジョンレノンで有名な「イマージン」です。2001 年９月１２日、何の計画があったわけでもなかったのですが、ニューヨークのユニオンスクエアに、たくさんの人達が集まっていて、みんなワールドトレードセンターがあった方角を見つめていました。そのうち一斉にある人たちがイマージンを奏で始めた瞬間、そこに居合わせたたくさんの人達が一緒に歌い始めたのです。この曲はその時に収録したものです。

In “Imagine 21, part one & two,” I interviewed 43 people from diverse backgrounds. I asked people to speak about anything (preferably involving some emotional shift) for one minute. I received responses that varied widely in terms of language, content and tone. I then layered up to six images of people and mixed their voices. This piece stands as a metaphor for cultural integration. In part two, I videotaped reflections of 43 people’s faces one by one in a bowl of water. Each image stays on screen for approximately two seconds, creating a rapid interchange of the faces of the world. The video was mixed with the song “Imagine” that I recorded at Union Square in New York City on September 12, 2001.

September 12, 2001.

「イマージン21 Part 1」ビデオ作品18分 静止画（2002年）
“Imagine 21, Part 1”, video, 18 minutes, still image (2002)

西洋と東洋は勿論のこと、もっと広範囲な文化の内面的且つ外面的な共存に興味を持っています。アートを作ることは私にとって、自分のアバターを作ることであり、そのアバターを違った次元の世界に送り込むことが目的です。

I am interested in the duality between Western and Eastern cultures, the inner drive – the search for one’s alter ego, a second self that is created by the individual to live out a different version of reality in art.

アメリカに住み始めてから、特に「食」に関してとても気になり始めました。というのも、西洋の主食は言うまでもなく「パン」だからです。日本では全く普通に毎日食べていたお米が、アメリカでは特別なものになる。知ってはいたけれど、実感していなかった現実。「そうか、私の身体の大半はお米からできている？」のかもしれない。そこで作品の題名通り、「１００ポンドのお米」で等身大の自分をお米で作りました。この米彫刻は、お米の山の上に立っているようにも見え、お米の山の中に崩れ堕ち初めているようにも見えます。西洋で私は社会的少数派（マイノリティー）になり、お米を食べるアジア人キャテゴリーになる。そしてお抹茶や緑茶を飲む特別な人になる。英語を話しても不思議なアクセントがあり、習慣も違う。私が生まれた故郷はニューヨークからみると、地球の裏側にあり、このアメリカという国にいると、不思議な惑星にきてしま

ったような、そんな感覚になるときがある。ここにいると自分が分裂していくような気分になる時がある。ここにいると、意図的にアピールしようとする自分と社会に必死にブレンドしたいという分裂した自分がいることに気がつく。もし日本にずっと住んでいたら、この作品は作っていなかったかもしれません。

After I began living in U.S., I came to take a more detailed notice of my eating habits. I thought, “I am mostly made of rice!” In 100 Pounds of Rice, the self is literally and symbolically reconstructed out of rice. Using Elmer’s glue and rice, and even translucent rice noodles as hair, I recreated my likeness as a “rice woman.” The sculpture is standing on a mountain of rice that the female figure both triumphantly emerges out of, and drowns down into. Ordinary things I had never previously paid attention to in Japan became very unique subjects in my everyday life here. I look different, I eat rice, I am an Asian. I drink green tea, when I speak I have accent, and I do in fact behave differently. My birthplace is the other side of globe, and in this country it sometimes feels as though I fell from a different planet. I find myself torn sometimes deliberately trying to appeal to my natural existence, and sometimes I just want desperately to blend in.

「Rice Myself」パフォーマンスビデオ　3 分　写真　58 x 75 cm

（2005 年、2017 年）

“Rice Myself”, performance video, 3 minutes, still image, 58 x 75 cm

(2005, 2017)

「１００ポンドのお米」彫刻、150 x 150 x 135 cm（２００４年〜２０１３年）
“100 pounds of rice”, rice sculpture, 150 x 150 x 135 cm (2004~2013)

　ユーゴスラビアがまだ健在だった頃、チトー大統領の時代に建てられた原爆シェルターで、アート・ビエンナーレが行われました。そのビエンナーレ出展についてクロアチアのキュレーター、ブランコ・フランチェスキから依頼が来ました。原爆シェルターに因んだ作品を作って出展して欲しい、という要望でした。その原爆シェルターはボスニアにあり、現在ユネスコ遺産の候補になっています。原爆といえば、どうしても真っ先に広島と長崎が思い浮かびました。そこで浮世にさ迷ってしまった広島の亡霊となったパフォーマンスをビデオで撮り、展示しました。その亡霊は、色々な神々に成仏できる

よう、お祈りしているのですが、広島のあまりに残酷なさまを体験してしまったため、戦争の惨さを忘れきれず、そこから抜けきれず、なかなか未だに成仏ができないと嘆いているパフォーマンスです。それをビデオに収録しました。このビデオは常設になっているため、今でもボスニアの原爆シェルターで展示されています。

In my video “Room B-29”, I became a Hiroshima phantom, touching rice and chanting for departed souls. She is ringing the bell from the shrine and touching rice, which, in this work, is a metaphor for life. She is chanting and asking forgiveness of her sins, to forgive everybody who is indebted to her. She tries to depart in peace; however, her soul is lost in this transitory world. The memories are too vivid, too alive in her mind.

「Room B-29」ビデオインスタレーション、３分　静止画（2013年、2015年）
“Room B-29” Video Installation, 3 minutes, still image (2013, 2015)

「ゴールデン・バスケットボール」のパフォーマンスでは、白いキャンバスに色を塗る、というイメージで、白無垢、白い鬘を被り、白塗りになり、ニューヨーク大学が近くにあることでも有名な、グリニッジビレッジにある野外バスケットボールコートに登場し、ひたすら金色に塗ったバスケットボールをドリブルしたり、シュートしたりするパフォーマンスをしました。

映画、Hoop Dreams でも伺えるように、未だに人種差別が激しいアメリカです。低収入所得の黒人家庭が比較的多く、黒人の多くはパブリックハウスなどに住んでいます。差別や貧富の差など、色々な弊害があるため、それを乗り越えて多方面の分野で成功するのは、まだまだ大変難しい状況です。そんなアメリカでも唯一、黒人が平等に競争ができる分野はバスケットボールなんです。バスケットボールコートは、テニスコートなどとは異なり、街角のどこにでもあって、無料で誰でも使用できるので、いつでも練習ができます。バスケットボールで成功することは、まさに黒人のエリートコースなのです。優秀な選手になると、スカラーシップが出るため、レベルの高い有名な学校を選択することができます。ですが、体を故障してしまい、今までのようなパフォーマンスができなくなると、たちまちスカラーシップはもぎ取られ、今まで通っていた学校にも行けなくなってします。そんな厳しい世界です。

この作品は、そんなバスケットボールをメタファーとして使っています。アメリカの夢を追い続け、ゴールデンボールでバスケットのゴールに何度もスコアしようとするのだけれど、ボールをドリブルしながら走り回るだけで、どんどん着物が汚れていき、金色のメッキが剥がれて行く、そういうパフォーマンスです。

In “Golden Basketball,” I dressed up in a white wedding Kimono, wore a white wig and painted my face white like a theatrical Japanese ghost. This ghost-like figure chases the American Dream as represented by the Golden Basketball. I single-mindedly dribbled and shot the ball, however, the more I dribbled, the more golden color came off the ball.

「ゴールデン・バスケットボール」パフォーマンス写真　150 x 100 cm（2008年〜）
“Golden Basketball” performance photography, 150 x 100 cm (2008~)

ニューヨークのエクジットギャラリーで披露した「白い目」のパフォーマンスでは、白い髪の鬘を被り、顔から足の先まで真っ白に塗り、白い服を着、自分自身が「白い目」になりました。そして、観客に「色々な言葉で罵ってください、または罵倒してください。」と頼み、その罵られた言葉を、筆を使って和紙に赤いインクで書き、一枚一枚、床に並べていきました。パフォーマンスの最後に、その床に並べた紙を集め、清めるためにすべて焼きました。

For “the White of the Eye or “Shiroi Me” which in Japanese to fix a person with an icy stare, I wore a white dress and painted myself with white to become the white of the eye. I asked people to “tell me a swear word” or “tell me something nasty”. Then I wrote their words with red ink on rice papers. At the end of the performance, I collected these papers and burned them to cleanse these impurities.

「白い目」パフォーマンスドキュメント写真　（2008年、2016年）
“Shiroime” (the white of the eye) means roll one's eyes back in Japanese. Performance photography (2008, 2016)

「シュワッチ・シリーズ」では、シャボン玉のような、または分子のようなものがいっぱいついた白い空手着を着た私自身のアバター（分身）を作りました。このアバターは人種差別や性差別、同性愛者差別などといったような数々の差別を嫌い、世の中に存在する不平等を相手に真っ向から戦うスーパーヒーローなのです。このシャボン玉は人間の魂の比喩でもあります。

In my “Shuwatt Series,” I remade myself as my avatar, dressed up with white Karate cloth or Kimono, covered with bubbles and photographed. My avatar is fighting against racism, sexism, and homophobic discrimination. She is an ideal character who isn’t afraid to fight for justice. Bubbles symbolize a spiritual metaphor for life.

「シュワッチ」シュワッ・シリーズより、写真 150 x 100 cm（2013年〜）
“Shuwattchi” (part of the Shuwatt Series), photography, 150 x 100 cm (2013~)

最新のプロジェクト「Far from Home」では、母国から離れてウィーンに移り住んでいる移民や難民、学生（アフガニスタン、シリア、イラン、コソボ、パレスチナ、ガーナ、日本、中国、韓国、ドイツ、スウェーデン、セルビア、メキシコなど）などの方々、１７人にインタビューし、それをビデオで録画しました。ビデオでは、私の質問に母国語で答えてもらい、英語と日本語の訳を字幕でいれました。インタビューの後、一人一人のポートレート写真を撮り、それらの写真をベースに、装飾的なパタンや風景などをバックグラウンドにとり入れ、コラージュのようなユニークなポートレートに仕上げています。このプロジェクトに参加してくださった人達と文化的に何か共通点があるような装飾パタンを探して使ってみました。その上からアクリル絵の具で色をさらに重ねていきます。このインタビューをして再認識したことは、とても普通では考えられないような体験をなさっている人がいたのですが、それにもかかわらず、実はとても温厚で、普通の人だった、ということでした。文化が異なると、違った視点からものを見たり、考えたり、身なりや習慣が違ったり、身振りが違うかもしれませんが、その反面、それとは全く関係なく、人の根本的な考え方や振る舞いはとても似通っている、ということを再確認したのです。母国を離れて新しい地で暮らし始めた人達が、故郷を懐かしんだり、新しい地に馴染めず孤独になったり、ホームシックになってしまうのは、どんな人種でも、国籍でも、共通していることなのです。母国がどこであれ、誰でも生まれ育った故郷を懐かしがるし、また帰りたいと思うのです。必要に迫られ、転々と居場所を変えることは、時としてとても大変なことです。難民は好んで難民になったのではなく、生活状況がなんらかの理由で脅かされたため、サバイブのためにとった手段なんです。日本は国連に多額の寄付はしているとはいうものの、ほとんど難民を受け入れていません。ウィーンとは異なり、アメリカでは難民を郊外に配置するため、あまり会う機会がありません。それにヨーロッパと比べると、難民をあまり受け入れていません。そんな日本やアメリカに住んでいる聴衆者に、この作品を通して、何かを感じてもらえたらと思います。

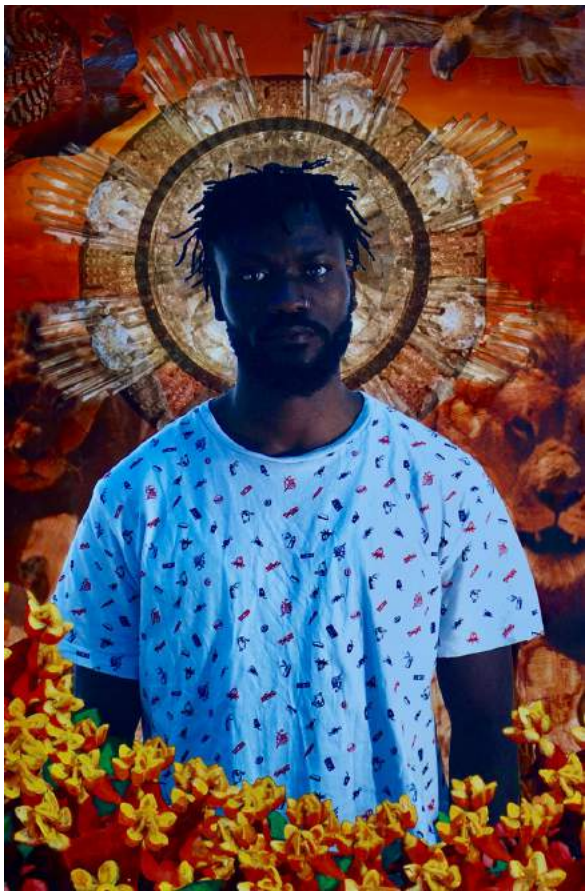
In my newest project “Far from Home,” I interviewed and videoed 17 people who are from abroad, including students, refugees and immigrants (from

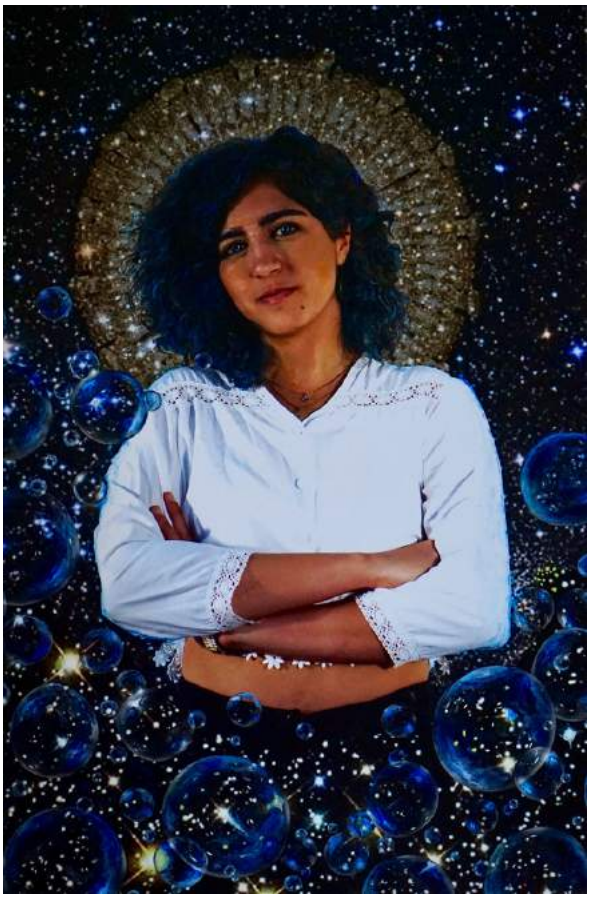
Afghanistan, Syria, Iran, Kosovo, Palestine, Ghana, China, Korea, Japan, Germany, Sweden, Serbia and Mexico) in Vienna. I asked them to speak in their own languages and then put subtitles in English and Japanese over the video. The photos of participants I took after the interviews, I am creating unique portraits; making the backgrounds with decorative patterns and landscapes. and create collage like environments. I am trying to find some patterns which somehow connecting to these interviewees. Then I paint with acrylic paints on the photos to finish. I realized that some of them have been living through extraordinary times but besides that, they are just ordinary people like us. It is important to recognize that people from different cultures have a variety of ways of looking at things, different ways of expressing their personalities and their goodness, and different ways of dressing. However, it is quite obvious that we are very similar in many ways. People from abroad often struggle with loneliness and homesickness. It is our nature to miss the familiar in an unfamiliar place. Additionally, sometimes it is a struggle to have many homes. Many asylum seekers didn't choose to leave their homeland -- they were forced to do so under devastating situations. Though Japan is one of the largest donor to the UN Refugee Agency, Japan accepts very few refugees. There is not much chance to meet them in person on a regular basis. Over 5,000 refugees came to New York state last year and 94% settled outside of New York City (voanews.com). Unlike Vienna, there is no visibility in New York City. In my work, I would like to show their existences with full of hope and futures.

この作品は 2018 年 9 月に金沢２１世紀美術館市民ギャラリーで展示する予定ですので、その際には是非ご観覧ください。

I am going to exhibit this project in September 2018 at the city gallery of Kanazawa 21st Century Museum. Please do come to see the exhibition.

「ヌゥール」ビデオ、長さまだ未定（2016〜）
"Nour", Video, duration unknown (2016~)





左：「アモアコ」写真、アクリルペイント、40 x 26.3 cm（2016年〜）
Left: “Amoako”, acrylic paint on photography, 40 x 26.3 (2016~)

右：「ヌゥール」写真、アクリルペイント、１６ x 26.3 cm（2016年〜）
Right: ”Nour”, acrylic paint on photography, 16 x 26.3 cm (2016~)

(Described in March 2018)

略歴

個展：

２０１８年　日本　金沢市　２１世紀美術館市民ギャラリー
２０１７年　オーストリア　ウィーン美術アカデミー　展示ロビー
２００９年　クロアチア　スピリット市美術館
２００６年　アメリカ　ニューヨーク　インターナショナルセンター
２００４年　日本　金沢市　インフォームギャラリー
１９９８年　アメリカ　フィラデルフィア　ペンシルベニア大学　ブルー＆レッドルーム
１９９４年　アメリカ　サンフランシスコ　ディエゴ・リベラギャラリー
など

グループ展：

２０１５年　フランス　パリ　ルーブ美術館　世界の写真家デジタル展示
２０１４年　アメリカ　ニューヨーク　ポストマスターギャラリー
２０１３–２０１４年　アメリカ　ワシントン DC　スミソニアン美術館ポートレートギャラリー　ボスニア　コニッツ　元原爆避難所美術館　国際ビエンナーレ
２０１２年　日本　東京都美術館　プリント東京２０１２
２０１１年　アメリカ　ニューヨーク　エアーギャラリー
２０１０年　アメリカ　ニューヨーク　エクジットギャラリー
２００９年　クロアチア　ザグレブ　HDLU 美術館
ベルギー　ブリュッセル　カルチャーセンターギャラリー
２００８年　ウエストアフリカ　カメルーン　国家図書館
２００７年　アメリカ　マサチューセツ大学　ハンプデンギャラリー
２００６年　アメリカ　ラトガーズ大学　大学ギャラリー
２００５年　イタリア　ボロニア　フラッシュアート
２００２年　アメリカ　ニューヨーク　エペックスアートギャラリー
２００１年　中国　香港　香港文化庁主催　パラサイトギャラリー
２０００年　アメリカ　バルチモア美術館
など

助成金受賞：

２０１６年　ウィーン美術アカデミー　客員アーティストレジデンシー
２００９年　ティファニー・ファンデーション　ノミネート
２００５年　ニューヨーク・ファンデーション・オブ・アート
アルジャイラ・コンテンポラリー・アート
２００３年　日本文化庁芸術家海外派遣助成

２０００年　ポーラ美術財団芸術家海外派遣助成
１９９８年　スコヒーゲン芸術村レジデンシー
１９９４年　ジャパンファンデーション　グローバルパートナーシップ
など

１９９７年　ペンシルベニア大学大学院　芸術／絵画油絵コース　卒業
１９９３年　サンフランシスコ・アートインスティテュート　絵画コース　卒業
１９９２年　サンフランシスコ州立大学　アート文系コース　卒業

Profile

Solo Exhibition:

2018 Kanazawa 21 Century Museum, Kanazawa, Japan, Ishikawa International Salon, Kanazawa, Japan.
2016 Atelier at the Academy of Fine Arts Vienna, Austria.
2009 City Museum of Split Gallery, Split, Croatia.
2006 Rice Scream, Rice Art, The International Center in New York, NY.
2004 The Pursuit of Borderless Love & Peace, Inform Gallery, Kanazawa-City, Ishikawa-Prefecture, Japan.
2003 The Calming Waters Show, Lot 61, New York, NY.
1998 Blue and Red Room, University of Pennsylvania, PA.
1995 Live Art Gallery, San Francisco, CA.
1994 The Irving Street Gallery, San Francisco, CA.
1994 Diego Rivera Gallery, San Francisco Art Institute, San Francisco, CA.
etc.

Group Exhibition:

2015 Photographer from around the world, digital display at Louvre Museum in Paris, France.
2014 “This is what sculpture looks like”, Postmasters Gallery, New York, NY.
2013~14 The Outwin Boochever 2013, Smithsonian National Portrait Gallery, Washington DC.
2013~ The Project Biennial of Contemporary Art, D-0 ARK Underground, Konjic, Bosnia. This exhibition’s digital images traveled to the special pavilion at Venice Biennial.
2012 Prints Tokyo 2012, International Print Exhibition Tokyo 2012, Tokyo Metropolitan Art Museum.

2009~ HRAM/ TEMPLE, HDLU/ Croatian Association of Artists Museum, Ring Gallery Zagreb, Croatia.
2008 AMERICAURA, Cameroon at the National Library of Yaounde, Cameroon, Yaounde, West Africa. Penn Design New York, Louis K. Meisel Gallery, New York, NY.
2007 Photo Miami, Volf, Art Basel Miami.
2006 Douglass Women's Show, curated by Molly Snyder-Fink and Joan Snyder, Rutgers University Gallery, NJ.
2005 "Flash Art Fair", Bologna, Italy.
2002 "Unjustified", curated by Kerry James Marshall, apexart curatorial program, New York, NY.
2001 "Sticky Fingers" Para/Site Art Space curated by Sanford Biggers (supported by the Hong Kong Arts Department Council) Hong Kong, China.
2000 Snap Shot, Contemporary Museum, Baltimore, MD.

etc.

Grants:

Visiting Artist Grant, Academy of Fine Arts Vienna, Vienna Austria 2016.
Tiffany Foundation Nominee, New York, 2009.
New York Foundation for the Arts by New York State, Artist Fellowship of Performance Art/ Multidisciplinary Work, 2005.
Emerge 7, Aljira, a Center for Contemporary Art, Newark, NJ, 2005.
Agency for Cultural Affairs of Japan, one-year oversea Artist Grant, Japan, 2003-2004.
Pola Art Foundation, one-year oversea Artist Grant, Japan, 2000.
Post -Art, Artist Grant, Chicago, 1999.
Skowhegan School of Painting and Sculpture, 1998.
University of Pennsylvania, Honorable Student Scholarship, Philadelphia, 1995~1997.
The Japan Foundation, Center for Global Partnership, Exchanged Student and Instructor Scholarship, San Francisco, 1994.
San Francisco Art Institute, Honor Student Scholarship, San Francisco, 1993.
San Francisco State University, Honorable Student Scholarship, San Francisco, 1990-1992.

etc.

Education:

Skowhegan School of Painting and Sculpture, 1998.
University of Pennsylvania, Painting and Drawing, M.F.A., May 1997.
San Francisco Art Institute, Painting and Drawing, B.F.A., December 1993.
San Francisco State University, Liberal Art, BA. May 1992.